

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	長 島 利 行
2. 審査委員	主 査：（上越教育大学教授） 林 泰 成 副主査：（兵庫教育大学教授） 谷 田 増 幸 委 員：（上越教育大学教授） 梅 野 正 信 委 員：（上越教育大学教授） 水 落 芳 明 委 員：（上越教育大学教授） 木 村 吉 彦
3. 論文題目	高等学校の道德教育におけるモラル・スキル・トレーニングの開発的研究 一定時制高校の事例を中心として—
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 長島利行 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成29年2月26日（日） 14時00分～14時30分</p> <p>場所：上越教育大学 東京サテライトキャンパス 6階 604室</p> <p>1) 学位論文の構成と概要</p> <p>論文の構成は以下のとおりである。</p> <p>第1章 本研究の目的と方法 第2章 モラル・スキル・トレーニングの理論的検討 第3章 高校版モラル・スキル・トレーニング・プログラムの開発 第4章 高校版モラル・スキル・トレーニングの実証的研究 第5章 高校版モラル・スキル・トレーニングの観点別評価 第6章 現職教員の研修及び教員養成段階における高校版モラル・スキル・トレーニングの試み 第7章 全体的考察と残された課題</p> <p>各章ごとの概要は以下に示すとおりである。</p> <p>第1章では、道徳的に正しいことがわかっているのに行動に移せない高校生に対して、具体的な行動の指導を行うスキル・トレーニングを取り入れた道德教育プログラムが効果的であろうとの問題意識から、高校における道德教育や、ソーシャルスキルトレーニング、ライフスキル教育などの先行研究に言及したうえで、本研究の目的は、高校生の実態に応じたモラル・スキル・トレーニング・プログラムを開発し、その実践的有効性や実践的課題を明らかにするということが示され、さらに、研究方法として、質問紙調査による実証的な方法と解釈的アプローチを併用することが示されている。</p> <p>第2章では、高校で道德教育を導入している茨城県の公立高校の事例を示して、高校に求められるモラル・スキル・トレーニングの指導形態が考察され、小中学校における同種のプログラムとの比較検討によって、主体的に道徳的スキルを学習したいと実感できるプログラムの必要性を説いている。</p> <p>第3章では、高校生に自由記述で日常場面での人としてのマナーやルールについて問い、その結果から、困っている人に席をゆずるなどの4つの行為に注目し、プログラムを作成している。その際に、高校生の発達段階を考慮して、小中学校のやり方とは異なり、ペアでの話し合いの後グループごとの発表で他者の意見を取り入れ、その後さらにペアでロールプレイを行うというスタイルの授業</p>

展開を提案している。

第4章では、定時制の県立B高校で4つのモラル・スキル・トレーニング・プログラムを実施し、分析している。研究のスタイルは、4回のプログラム授業を行った実験群と、何もしなかった統制群の両方で、事前・事後に道徳性診断テストHEARTを実施し、その変化を比較するというものである。結果として、実験群では、行動傾向の4つの下位項目のすべてが上昇しているものの、統制群では3つしか上昇していないという違いは見られたが、明確な差異は出なかった。そこでさらに、生徒への聞き取り調査を行うことで、プログラムの課題を探ろうと試みた。その結果、他者に関心を示さない生徒に対する対応と、ロールプレイに恥ずかしさを感じる生徒への対応を考えなければならないことが示されている。

第5章では、道徳の評価に関して検討している。まず公立高校で道徳教育を導入している茨城県での取り組みを取り上げ、検討したうえで、評価表のモデルを作成し、それに対する教師の評価および生徒の評価を4件法と自由記述で収集し、道徳の時間が設置されていない高校での実践に合わせて、ホームルーム活動のねらいに即した観点を設けることの必要性に言及されている。

第6章では、高校の教員を対象に、モラル・スキル・トレーニングを模擬的に試行し、その後の質問紙調査によってその可能性を尋ね、肯定的な反応を明らかにしている。しかし、一部には、勤務校において実践することに不安を感じている教員もいることが示されている。その結果から、スキル・トレーニングの導入には研修も必要であることが示されている。また、教員養成段階の大学生にも同様に試行的に実践し、質問紙調査を行っている。彼らも概ね肯定的に受け止めていることが明らかにされている。

第7章では、全体的な考察と残された課題が示されている。考察においては、教育困難校と言われるような定時制高校での実践であることにも大きな意義があることが述べられている。つまり、入試の際にいわば偏差値で輪切りにされている高校では、小中学校と違って、高校間の差が大きく、進学校だからできる実践というようなものもあるが、本研究での取り組みは教育困難校でのものであり、困難校でできるなら他校でもできるというような判断が成立するというのである。課題としては、取り組みの一部は、担任教師と生徒が一体となって取り組んだ取り組みであったために、実践が情に流されるような部分があった可能性も否めないということが記されている。

2) 審査経過

(1)研究目的と論文構成の整合性について

本研究の目的は、高校生の実態に応じたモラル・スキル・トレーニング・プログラムを開発し、その実践の有効性や実践的課題を明らかにすることである。そのために、まず、モラル・スキル・トレーニングについての理論的な考察から始め、高校生への調査からプログラム案を作成し、実践したうえでその効果を検討している。また、小中学校においても問題になっている道徳の評価を取り上げ、評価表の提案を行っている。さらに、教員を対象にした模擬的な試行、これから教員になる大学生を対象にした模擬的な試行によってその効果を補完的に確認している。よって、研究目的と論文構成に十分な整合性があると判断された。

(2)学位論文としての独創性と発展性について

高等学校における道徳教育は、通常は、授業として行われているわけではないが、最近、いくつかの県において授業として実践され始めている。今後も広がっていくと思われるが、そうした時代の流れにあって、本論文は、高校において行為の指導にかかわる道徳教育の授業プログラムを開発し提案しようとする意欲的な試みである。グループごとの発表など、小中学校のモラル・スキル・トレーニング・プログラムにはあまり入れられていない手法を導入するなど、現場目線でさまざまな工夫を取り入れている点に実践的な独創性を見ることができる。また、その実践を量的な視点からだけでなく質的な視点からもとらえている点に研究としての独創性が見て取れる。今後、実践的な検証の積み重ねによって研究の発展が期待できる。

(3)学校教育や社会への貢献について

長島はこれまで、高校教員として、また県の指導主事として、茨城県の高校における道徳教育の実践をけん引してきた。今回の研究において実践開発に取り組んだモラル・スキル・トレーニング・プログラムは、今後、高校の道徳教育の実践プログラムとして活用されることが大いに期待される。

3) 審査結果

以上により、本審査委員会は 長島利行 の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。